

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3590700179		
法人名	株式会社アッセンブルピープル		
事業所名	グループホームふぁみりあ		
所在地	下松市藤光町一丁目12-18		
自己評価作成日	令和3年 1月16日	評価結果市町受理日	令和3年6月18日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 やまぐち介護サービス評価調査ネットワーク		
所在地	山口県山口市吉敷下東3丁目1番1号 山口県総合保健会館内		
聞き取り調査実施日	令和3年2月18日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍で家族との面会や外出支援が行えなかったが、季節の行事、誕生日などを事業所内で参加できるように、本人の能力に応じた配慮をしながら行い、それぞれが楽しめるような工夫をした。いつも以上に壁絵作成をレクリエーションの時間を活用して本人が準備作業できるように工夫した。内科の往診に加え、歯科往診で医師や歯科衛生士による口腔内の管理を開始し、摂食の様子を見ていただき本人の能力が向上できるよう助言を頂いたり、口腔内の清潔を保てるようにしてもらったことで、本人が食べる喜びを感じている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍によって面会できない家族に、ラインを活用されて利用者の日常の様子を画像や動画を送信され、家族との関係が途切れないように取り組んでおられます。家族からは「記録や面会だけではわからなかった利用者の抱えている課題や介護の状況が良く分かるので送信頻度を増やして欲しい」と、好評を得ておられます。職員もグループラインの活用によって、利用者の変化やケア状況をタイムリーに把握され、共有できるようになり、連絡ノートの廃止や会議時間の短縮をされ、利用者と共に過ごせる時間を多くつくって支援しておられます。利用者の外出が困難なことから、職員は、トロロの立体貼り絵や季節の壁画(桜、鯉のぼり、カエル、海の生き物、紅葉、クリスマスリース、丑年、蒔のとう)づくり、旅行番組のテレビ視聴等、利用者の希望と一人ひとりの力を活かされ、工夫をされて支援しておられます。職員はコロナ禍以前と「変わらない生活」であるよう、利用者に寄り添われて、穏やかな笑顔の毎日であるよう支援に取り組んでおられます。

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員は、活き活きと働いている (参考項目:12. 13)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:31. 32)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:29)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を掲示している。 管理者の理念やこれからの思いを仕事での会話の中で感じ取ることができる。	地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、事業所内に掲示している。管理者と職員は毎月のミーティング時に理念について確認して共有し、カンファレンスやサービス計画会議では「利用者本位のケア」になっているかを話し合い、利用者一人ひとりが穏やかに笑顔で暮らせるように実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍のため家族会などは行えなかったが、職員が地域の方と挨拶を交わしたり、自治会総会などの活動に参加して交流できている。	自治会に加入し、管理者が総会に出席して地域行事の把握や活動の情報を得ているが、利用者が参加できる地域行事や活動はなく、事業所でも地域の人に参加する行事を実施していない。コロナ禍の為、利用者は敷地内から外に出ることは医療機関受診の時だけである。地域の人が事業所の敷地内で畑仕事をしている利用者にも、敷地の外から、気軽に言葉をかけてきたり、花や野菜(大根、青菜、芋のつる)、果物(みかん、金柑、柿)、旅行のお土産の差し入れがあるなど、日常的に自然な交流をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の人が外に出て畑作業をするなどしている様子を見て、近隣の方が立ち寄りたり挨拶されるなど気軽な雰囲気を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	今までのよい評価は継続し、改善できる点はサービス担当者会議などで取り上げ、改善するよう一つずつ取り組んでいる。	管理者は職員に評価の意義を説明し、リーダーが前回の評価結果について説明をした後、職員各自に自己評価の用紙を配布し、記録後にリーダーと管理者がまとめている。職員は評価項目を理解しており、自己評価を日々のケアの振り返りと捉えている。前回の外部評価結果を受けて目標達成計画を立て、事故防止に向けての実践研修(転倒、移乗、感染防止)の実施や、ラインの利用によって利用者のペースで暮らせるように、日常業務の工夫や改善をし、ゆとりある時間を捻出するなど、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍のため、文書にて情報を提供し報告した。要望等を回収しその議事録を参加予定者に配布するとともに、職員間で周知するよう回覧した。	会議は2カ月に1回、メンバーに事業所の運営と利用者の状況、行事予定、活動状況、事故、ヒヤリハット報告、外部評価結果報告、職員の研修報告を文書で報告している。送付時には、評価、要望、助言、その他の欄を設けた文書「意見書」を同封し、返送してもらっている。「意見書」の内容はまとめて、メンバー全員に配布している。メンバーからは、感染対策についてやビデオ通話と窓越し面会のすすめ、利用者と職員の心のケア、個人情報漏えいに注意してほしい、家族とのふれ合いに動画を送ってほしい、ラインでのビデオ通話は家族が安心できるなどの他、労いのことばがあり、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	
6	(5)	○市町との連携 市町担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	電話連絡等で必要な情報交換、協力を仰いでいる。	市担当者とは運営推進会議時や電話、メール、直接出かけて、情報交換や相談をして助言を得るなど協力関係を築くよう取り組んでいる。地域包括支援センター職員とは運営推進会議時や電話で情報交換を行い、連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	新人職員へは身体的拘束との指針を配布し研修を行っている。職員にはミーティング等で具体的な事例などを紹介するなどしている。ケアチェック(別紙)などで、身体拘束をしないケアをしているか自らが確認している。	職員は「身体拘束等の適正化のための指針」をもとに年2回、内部研修(身体的拘束および虐待の防止)で学び、毎月、「ケアを振り返るアンケート」の実施と、2月と8月に「虐待の芽チェックリスト」を実施をする中で、身体拘束、虐待の内容や弊害について正しく理解している。3か月毎実施の「身体拘束等適正化委員会」はメンバーが運営推進会議と同一であり、コロナ禍の為、委員会が開催できず、メンバーからの要望もあり、アンケートとチェックリストの結果を集計し、報告して職員の身体拘束、虐待をしていない現状を分かってもらっている。玄関には施錠をしないで外出したい利用者があれば職員と一緒に玄関先に出たり、敷地内を散歩して気分転換を図り、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	コロナ禍のため、外部研修等の参加は見送った。常日頃から虐待防止には努めており、虐待の芽チェックリスト(別紙)を使って意識を高め、職員同士で相互注意し合っている。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者や職員が認知症介護実践者研修等に参加し、社会制度について勉強した。入居者の背景によって必要だと想定されるときは、ミーティング等で話し合っている。		
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	コロナ禍のため、直接の面会等は控えているが、LINE等含め家族等と相互に連絡を取りやすい環境を整えた。寧ろ素早く情報交換ができるようになったり、写真などを送ることで様子が理解できると喜ばれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談・苦情を受けた場合は、管理者が受付、または職員から報告を受け、文書やLINE等で職員へ周知し、できるだけ速やかに改善するようにしている。その内容は、当事者へ報告するとともに運営推進会議で外部へ表明している。	苦情相談窓口や担当者、第三者委員、処理手続きを明示し、契約時に家族に説明をしている。家族からは面会時や運営推進会議参加時に聞く他、電話やメール、ライン、手紙でも、意見や要望を聞いている。意見や要望は「苦情相談要望書」や連絡帳に記録するとともに、ラインで職員に知らせて職員間で共有している。3カ月毎に、家族宛に行事に参加している利用者の笑顔の写真を載せたA3の事業所便りを送付し、毎月、利用者を担当している職員から利用者の健康や暮らしの様子を記録して送付している。月に1回、「モニタリング報告書(近況報告、医師のコメント、心身の状況、介護予定等)」をラインで送り、利用者に変化があった時や困難な状況を理解してもらうために動画を送って、苦情や相談が言い易いように取り組んでいる。家族からは、記録や面会時だけではわからなかった利用者の抱えている課題や介護の状況が、ラインによるタイムリーな送信と動画によってよくわかるので、ラインでの面会や動画の送信頻度を増やして継続して欲しいことや、窓越しの面会、感染症対策の推進についての他、感謝の言葉があり、それらを運営に反映している。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別の面談等で職員が対等に話し合っている。	管理者は毎朝のミニミーティング時や月2回あるミーティング、担当業務(園芸、備品、レクリエーション、印刷)の中で聞く他、6か月毎、個人面談を行って聞いている。職員とのコミュニケーションを大切にしており、管理者の方から話しかけるようにしている。日常の気づきや提案はラインの「グループライン」に記録して職員間で共有している。職員からは、ラインの効果的な活用によって(利用者の変化やケア状況を全職員がタイムリーに共有できること、連絡ノートの廃止、会議時間の短縮等)個別ケアの時間が捻出できていることや、ケアの実際を家族に動画で知らせていることで、何事も家族が了解しているので自信を持って介護ができるなどの意見があり、運営に反映している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	普段から話し合い、年2回程度の個別面談をしているが、さらに職場環境や条件の整備に努めていくようにする。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため、社外研修の参加は必要最低限のみを受講した。(中堅、リーダーのキャリアパス研修など) ほかに研修の機会があることを提案し、勤務を配慮(出勤扱い)とした。	外部研修は、職員に情報を伝え、希望や段階に応じて勤務の一環として受講の機会を提供し、中堅研修とキャリアパス研修に各1名、感染症の予防と対策に1名受講している。受講後は受講報告書を回覧し、内部研修で伝達してもらい、資料はいつでも閲覧できるようにして全職員が共有している。内供研修は、年間計画を立て、外部講師や管理者が指導者となって、毎月1回、身体拘束等及び虐待の防止や嚙下、口腔ケアの意義と方法、移動介助の工夫、事故防止とクライシスマネジメント、感染症、食中毒、服薬について、緊急時の対応等を学び、救命救急法とAEDの使用方法や転倒、移乗方法、感染症の対応(嘔吐、三密、消毒薬の取り扱い、手洗い、マスク着用)や食中毒について実践研修を実施している。欠席者には議事録や「グループライン」で知らせている。新人職員は日常業務の中で、管理者や先輩職員の指導を受けて介護の知識や技術を学べるように支援している。	
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため訪問などはできなかったが、グループホーム協会などの電話やリモートを活用しての交流会には参加した。		
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が不安な様子が見られる時ほど、職員がそばで寄り添い、本人の思いを汲み取れるよう傾聴した。その思いをひもときシートなどを活用して職員間で共有し、その家族と相談しながらサービスに生かすようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	要望等を管理者や計画作成者が電話や文書で受け付け、それを職員間で情報共有している。センター方式を使用している。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要な支援が何なのか見極めるために管理者や計画作成者が本人やその家族から聞き取りを行い、本人やその家族の同意を得てサービス計画を作成し、その内容を職員と文書やLINEを使用して共有している。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	毎日が楽しく、穏やかに過ごせるよう「人」として個人の尊厳を持って職員が1人1人に合わせた声かけや支援をしている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍のため、直接の面会や外出外泊ができなかったが、LINEや窓越しの面会で、本人とその家族が交流できる機会を作り、家族は積極的に利用した。		
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため、直接の面会ができないことを説明し、理解してもらっている。代わりに本人が手紙や電話ができるように支援している。	家族の面会（ドア越し、ビデオ面会、ライン）の他、携帯電話や手紙での交流を支援している。毎月、馴染みの美容院から美容師が来訪し、半数に分かれて整髪している。事業所内に荒神様を祭り、神社詣りや初詣をして、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援に努めている。	
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係に気を配り、相互の関係が良好になるよう職員が間に入り説明したり、その関係をそばで見守るなどして支援している。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族等からの要望があれば、相談を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族から以前の暮らしの様子を聞いたり、日々の本人との話の中で、本人の希望や思いを聞くようにしている。センター方式を使用している。	入居時にはセンター方式のシートを活用して、本人や家族からこれまでの暮らしの状況や長年馴染んできた習慣や趣味、好きなこと、嫌いなこと、得意なことなどを聞き取り、思いの把握に努めている。日々の関わりの中で利用者の発した言葉や行動、表情、「本人が今、何をしたいのか」を介護記録に記録して思いの把握に努めている。職員間のグループラインの活用によって、利用者の思いや意向をより詳細に把握し共有できるようになっている。困難な場合は職員間で話し合い、本人本位に検討している。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常の会話から、昔の暮らしなどを教えてもらったり、家族からアセスメントし、支援につなげている。センター方式を使用している。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員が本人の有する能力を見極め、できうる限り自分で出来るよう支援の方法を試している。本人が不穏なく生きがいを持って生活できるよう支援している。センター方式を使用している。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日、10時にミニミーティングをして、職員間で引き継ぎをしながら話し合える場を設けている。毎月1回サービス担当者会議を開催している。モニタリング報告書(別添)を毎月、家族へ送付している。	計画作成担当者と利用者を担当している職員が中心になって、日々、「グループライン」の中で情報を交換し、毎月1回、「サービス担当者会議」を開催して利用者や家族の思いや意向、主治医、歯科医師、薬剤師の意見を参考にして職員全員で話し合い、介護計画を作成している。毎月モニタリングを実施し、見直しをしている。利用者の状態や家族の要望に変化があればその都度見直し、現状に即した介護計画を作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	連絡ノート(LINEを使用)、サービス提供記録、業務日誌などで気づきなどの情報を共有し、重要事項については口頭で引き継ぎしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人との会話で希望をくみ取ったり、意向を伝えてもらったりして、事業所のルールを妨げなければ、環境を整備して安全に配慮したうえ、本人の思いを尊重し自由に生活できるようにしている。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のため外出支援を行っていない。下松市や近隣の広報誌や情報誌を読んでもらったりして地域の出来事や様子などの情報を提供するように努めている。		
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的な内科・皮膚科往診に加え、歯科往診もするなど、以前より適切な医療を受けられる機会を設けた。	利用者や家族の納得を得て、協力医療機関をかかりつけ医とし、月1回の往診支援をしている。皮膚科は3カ月に1回、往診があり、歯科は1カ月に1回往診(口腔機能改善、口腔ないケアを含む)があり支援している。他科受診はコロナ禍の為事業所が受診支援をしている。薬剤師は月2回、処方薬を持参し服薬指導を受けている。結果は「通院介護記録」や「業務日誌」「健診結果記録」に記録して職員間で共有している。家族には毎月、健診結果を記録した「モニタリング報告書」を送付して伝えている。夜間や緊急時には協力医療機関に連絡して適切な医療を受けられるように支援している。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的な往診時に、看護師からの助言を受け、適切な受診に繋げている。日頃の医療的なケアが必要と思われる状態のときは、看護資格を持つ職員から助言を受けている。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	管理者や計画作成者が対応し、入院時の様子や退院後の生活に支障がないよう情報を共有した。周南記念病院他のソーシャルワーカーとは頻りに情報交換している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人が介護度3以上になったときに、管理者と計画作成者が本人や家族に働きかけ、終末期のあり方について具体的に想定される様子を説明し、本人や家族が早い段階から心構えができるように協力し、今後の方針や希望について共有していけるよう関係性を築いている。	重度化した場合に事業所でできる対応について、家族に契約時に説明をしている。実際に重度化した場合(介護度3以上になった場合)には、早い段階から家族と話し合い、方針を決めて共有し、医療機関や他施設への移設も含めてチームで支援に取り組んでいる。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	研修に参加し、その情報を共有するために報告書の作成をし、職員が回覧している。薬剤師を招き、服薬方法の実習や緊急時対応について講習を受けた。	事例が生じた場合はヒヤリハット・事故報告書に発生場所や状況、原因、経過、今後の対応や課題を記録し、管理者の意見を添えて職員に回覧している。ミーティング時に再度検討して、一人ひとりの事故防止に努めている。服薬については薬剤師を招いて指導を受け、内部研修で事故防止とクライシスマネジメントや移乗介助、感染症、食中毒等について学び、救命救急法やAEDの使用法、車椅子の移乗方法や転倒、三密回避、消毒薬と方法等の実践研修を実施している。	・全職員が実践力を身に付けるため の応急手当や初期対応の訓練の継続
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の避難訓練や、ハザードマップを掲示することで意識を高め、BCP計画書の策定に着手している。	消防署の協力を得て、年1回、夜間の火災を想定した通報訓練や避難訓練、避難経路の確認、消火訓練、防災機器の使い方を利用者や家族、自治会、近所の人も参加して実施する他、防火管理者を中心に1回、自主避難訓練と防災機器の場所の確認を利用者と職員が実施している。管理者は自治会総会時や運営推進会議時には、防災訓練への参加を呼びかけている。地域との連絡体制を築くための連絡網やBCP(事業継続計画)計画の作成に取り組んでいる。災害時の非常用食品は利用者9人分の食料と飲料水を備蓄している。	・地域との協力体制の構築

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	1人1人が理解できる分かりやすい用語を使い、場の雰囲気にあった丁寧な声かけを心掛けている。	職員は内部研修(接遇プライバシー、個人情報)や管理者の「礼節を重んじ、ぞんざいな言葉を使わない」という指導を通して学び、一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。個人情報は適切に管理し、守秘義務は遵守している。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の昔話や生き立ちの話を職員を含め入居者同士で聞くなどして気持ちに寄り添うようにしている。本人が自分の思いを話しやすいように、一日の中でゆったり過ごせる時間を作るために、職員は業務の流れを分担して行い、入居者に触れ合えるよう心掛けている。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースに合わせて歩行運動やレクリエーションに取り組んでいる。調子の悪い時は無理をしないようにしている。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が自由に選んでいる。自分だけではするのが難しい人は、職員が思いをくみ取り、できやすい方法で本人と一緒にできるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事に集中できるような音楽をかけ、落ち着いた空間を作る工夫をしている。食事の前後にそれぞれの能力に応じてテーブル拭きをしている。	食事は部分調理が必要な配食を利用し、ご飯と汁物は事業所で作っている。畑で収穫した野菜(さつま芋、スナックエンドウ、インゲン豆、じゃが芋、苺)や職員が持参した野菜で1品、加えている。食べやすいように、形態の工夫や盛り付けの工夫をして提供している。利用者は野菜を洗ったり、皮を剥く、切る、混ぜる、炊く、盛り付け、並べる、お茶の袋詰め、ケーキのトッピングなど、できることを職員と一緒にしている。おやつづくり(ぜんざい、お汁粉、ゼリー、フルーチェ、蒸かし芋、パンプキンケーキ)や外庭での喫茶、ケーキの付く誕生食、ちらし寿司、季節行事食(おせち料理、七草粥、恵方巻、節句の寿司、クリスマス、年越しそば)、大根の浅漬けづくりなど、食事を楽しめるよう工夫をして支援している。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康記録(別添え)に記載した栄養や水分摂取量を職員がいつでも確認できるようにしている。自分だけでは摂取が難しい人には、補助食品や刻み食、トロミなどを用いて安全に自分で飲食できる支援をしている。		
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	職員が、歯科医師や歯科衛生士の指導を受け、1人ひとりに合った見守り、声かけにて口腔状態を清潔に保つ支援、介助をしている。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄の失敗がないようにリハパン等を着用し、おむつや防水シートを必要に応じて使用している。一人ひとりに合った間隔で声かけをし、職員と一緒に本人に合わせた方法で移動してトイレで排泄している。	排泄チェック表を活用して一人ひとりの排泄パターンを把握し、プライバシーに配慮した言葉かけや対応をして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている。リハビリパンツやパットを利用する際には職員で話し合い、根拠をはっきりさせて、家族にも説明してから使用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	なるべく下剤に頼らず自然排便になるよう、体調を観察して服薬量を調節している。毎日の適切な水分を摂取できるように支援をし、一人ひとりに合わせた適切な運動などで機能訓練をしている。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週2回程度の機会を設け、個浴で対応している。その間は職員と1対1での会話を楽しみ、いつもは話せないような本人の思いや希望を聞くようにしている。	入浴は14時から16時までの間可能で、週2回は入浴できるように支援している。順番や湯加減、好みの石鹸、季節の柚子湯など、一人ひとりの希望に添ってゆったりとくつろいだ入浴となるように支援している。入浴したくない人には無理強いしないで、時間を変えたり、職員の交代、言葉かけの工夫をして対応している。利用者の状態に合わせて清拭や手浴、シャワー浴と足浴の併用、部分浴、シャワーチェアやシャワーキャリーの利用等、個々に応じた入浴の支援をしている。	
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午後に静養の時間を設けている。本人の状況によって時間等は限定せず、入眠、休息できるようにしている。入居者の一日の流れ(別添え)		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	居宅療養管理指導(薬剤師)を受けている。服薬リストをいつでも確認できるように見やすい場所に備え、副作用と思われるときは薬剤師に相談している。毎回、飲み込みの確認、残薬チェックを職員が行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	誕生日会や季節の行事などで楽しみごとを作り、本人ができることは職員と協力して準備している。後日、撮影した写真や動画を見て楽しんでいる。	居室の掃除(はたきをかける、箒で掃く、モップかけ)、手すりを拭く、テーブルを拭く、リネン交換(枕カバー、敷マット、シーツ、布団カバー)、洗濯物をたたむ、洗濯物を収納する、花を生ける、花瓶の水を換える、メダカの餌やり、プランターや畑に種まき、苗植え、水やり、草取り、野菜の収穫、雑巾を縫う、繕いもの、広告でゴミ箱づくり、テレビやDVDの視聴、CDやラジオを聞く、新聞、雑誌、本を読む、写真集を見る、折り紙、ぬり絵、切り絵、貼り絵、書初め、俳句をつくる、七夕の短冊づくり、絵を描く、歌を歌う、季節の壁画(桜、鯉のぼり、カエル、海の生き物、紅葉、クリスマスリース、丑年、露のとう)づくり、かるた、トランプ(ババ抜き、じじ抜き、七並べ)、神経衰弱、カレンダーづくり、風船バレー、ボール遊び、ボーリング、卓球、双六、福笑い、チャンバラ、パズル、ラジオ体操、リハビリ体操、テレビ体操、口腔体操、早口言葉、脳トレ(計算ドリル、漢字ドリル、四字熟語、絵や文字の間違い探し)、言葉遊び、外庭での喫茶、季節行事(書初め、節分の豆まき、雛祭り、敬老会、ミニクリスマス会、ミニ運動会、忘年会、風船バレー大会)など、利用者が気分転換を図り、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍のため、外出支援は少なかったが、初詣や天候の良いころは敷地内で日光浴を行った。テレビ番組やDVDで本人が行ったことのある場所や懐かしい行事を見て話題にしている。	敷地内の散歩や外庭での外気浴や日光浴、喫茶、畑に出て、野菜の収穫(さつまいも、スナックエンドウ、インゲン豆、じゃが芋、苺)にでかけている。外出ができない中でも、季節を感じてもらえるよう利用者全員で、季節の壁画づくり(桜、鯉のぼり、カエル、海の生き物、紅葉、クリスマスリース、丑年、蒔のとう)に取り組み、テレビで旅行番組を見るなど、工夫をして利用者の希望と、気分転換を兼ねて、出かけられるよう支援している。	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の計算をするゲームなどの中で理解できる工夫をし、コロナ禍のため、外出する機会がなかったが、お金を実際に使う場面がなくならないよう買い物支援等は続けていきたい。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が書いた手紙は、本人と一緒に郵便ポストへ投函する支援をした。本人が年賀状を書き、家族へ近況を知らせる文書を書くなどの機会を設ける工夫をした。		
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	トイレ使用後は汚れていれればすぐに掃除している。壁に行事や季節を感じる作品を作り掲示している。感染症対策で共有空間が感染源にならないように席の向きを変えたり使用する物を区分けするなど、衛生活動をしている。	リビング兼食堂は天井が高く広々としており、自然光が差し込んで明るい。室内には食卓テーブルと椅子、大型テレビやカセットデッキ、空気清浄機等を設置している。三密に配慮して、椅子の向きや使用物品の配置に留意している。厨房からはご飯の炊ける匂いや調理の音がして、生活感を感じることができる。壁面には利用者と職員が一緒に作った利用者の大好きな「トロロ」の立体貼り絵や季節を感じる壁画(蒔のとう)が飾ってある。室内の温度や湿度、換気、清潔、消毒に配慮して居心地よく過ごせるような工夫をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人で過ごしたい人には一人席を設けている。様子を見ながら席替えをしている。レクリエーションでは、気の合った同士で話せるよう席を並べたりしている		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	今まで使っていた家具や寝具、好みの色の物を使い、居心地良く過ごせるよう支援している。	携帯ラジオ、テレビ、携帯電話、籐の五段衣装ケース、筆筒、時計、筆記用具、化粧品等整容道具、メガネ、手押し車、ぬいぐるみなど、使い慣れた物や好みのものを持ち込み、危険の無いように配置して、カレンダーやプリザーブドフラワーを飾って、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全を第一に考え、危険なものは撤去し、表示などで一目でわかる工夫している。		

2. 目標達成計画

事業所名 グループホームふぁみりあ

作成日: 令和 3 年 6 月 15 日

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35	事故防止の取り組みや事故発生時の備えについて、全職員の実践力の不足	事故防止の取り組みや事故発生時の備えについて、全職員の実践力を身につけ、応急手当や初期対応の訓練を継続する	社内会議で事例検討を行う。社内研修で初期対応模擬訓練を行う。	通年
2	36	災害時の避難方法について、全職員の実践力の不足	災害(火災、水害、地震等)が起こった時の備えについて、全職員の実践力を身につけるとともに、地域との協力体制を構築する	社内会議や社内研修でBCP(事業継続計画)を策定するとともに、事業所内でできる事、協力を要請する事、協力してもらうためにどのように依頼するかを検討する	通年
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。